

“IMMORTALITY ODE” を読む

黒 岩 忠 義

(1993年10月15日受理)

A READING OF “THE IMMORTALITY ODE”

Tadayoshi KUROIWA

は じ め に

いわゆる “Immortality Ode” (「永世の賦」, 「不滅のうた」 などとして広く知られている) が発表されたのは1807年 “Poems in Two Volumes, and Other Poems, 1800-1807”, 「二巻本詩集」に於いてである。1798年, *Lyrical Ballads* 「叙情民謡集」の末尾を飾った *Tintern Abbey* がその時期の作者の精神史を語るにふさわしいのと同じ意味に於いて, この詩もまた「二巻本詩集」の末尾におかれてその時期の詩人 Wordsworth の精神史を語るにふさわしく, 画期的で重要な位置を占めていることは注目に値しよう。この詩が1807年, 「二巻本詩集」の中で発表されたときはその題名は, 単に “Ode” という題名に過ぎず, Epigraph として “Paulo Majora Canamus” 「いささか, 大いなることをうたおう」が冒頭に置かれていた。これはローマの詩人 Publius Vergilius Maro (70-19 B. C.) の *Eclogues* (詩選; 10編からなる牧歌) 中の第4歌冒頭に見られる。

SICELIDES Musae, paulo maiora canamus.

non omnes arbusta iuvant humilesque myricae;

si canimus silvas, silvae sint consule dignae.

(イタリアック筆者)

シキリアの詩の女神たちよ, いささか大いなることをうたおう,
葡萄畑や地味な御柳 (ぎょうりゅう) が万人の気に入るわけではない。
森をうたうからには執政官にふさわしい森を歌おう。

しかし1815年版では本詩の題名は次のようにかえられて現在にいたっている。 *Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood* 「オード; 幼年時代の追想からの不滅の暗示」。そして更にもとの Epigraph は ‘My heart leaps up’ で始まる *The Rainbow* (1802) からの最後の3行に置き換えられ, 各 Stanza はローマ数字で区切られ, 第8 Stanza 中の121-122行間にあった To whom

the grave/Is but a Lonely bed without the sense or Sight/Of day or the warm light, /A place of thought where we in waiting lie; の一節は削られ、その他、多少の語句の違いはあるがほぼ現在の形式である。

My heart leaps up when I behold

A rainbow in the sky:

So was it when my life began;

So is it now I am a Man;

So be it when I shall grow old,

Or let me die!

The Child is father of the Man;

And I could wish my days to be

Bound each to each by natural piety.

(*The Rainbow*, イタリック筆者)

ここでは、おそらく少年時代に Coniston の溪谷で或る嵐の日に見たときの経験がもとになっているとされている¹⁾。虹は Wordsworth にとっては、カッコーがそうであったように一つの象徴として使われている。大空にかかる虹を見たときの作者の率直な感動と驚きは、幼児期も、大人になった今も胸は高鳴り感嘆したように、また将来もそうであり、日々の生活が自然への敬虔な気持ち ('natural piety') で結ばれていて欲しいという気持ちが詠われている。'The Child is father of the Man' 「子供は大人の父である」とは、そのような一見矛盾した表現によって、幼児期の新鮮な驚異の感覚がいつまでも薄れないでいて、それが大人の源泉であり、また虹はノアにとって神と人間を結ぶ契約のしるしであったように、詩人にとっては子供たちと大人とを結ぶ架け橋の symbol として、かついつまでも詩人としての想像力が枯渇されることなく継承されることの象徴として、その題材が選ばれたとおもわれる。というのは、詩人としての生涯がいまや試されようとしていたからである。この意味で、「虹」の歌からの一節が *Eclogues* からの語句に代って新たに、*Epigarth* として本詩の冒頭に付けられたことは *Immortality Ode* の主題を語るにもっともふさわしい選択であった。

Immortality Ode は構成上は全体で11の Stanza からなるが便宜上三つの区分に分けて読む必要がある。第一の区分を1-4 Stanza (1-57) で、第二を5-8 Stanza (58-129)、第3は9-11の Stanza (130-204) の3区分である。勿論、このような区分による読む方には異論がある。Lionel Trilling は第一区分を前半とし第二と第三の区分を後半とみなし、その後半の二つは前半に対する解答とみなしその結果、前半に対する後半の二つの部分の対応に矛盾が認められることを指摘している²⁾。また、Arthur Beatty は第一区分と第三区分を一貫性ある詩とみなし、第二区分を 'intercalary

poem'「挿入詩」に過ぎないと断じ、また詩人がこの詩を一つの全体と看做す根拠を前部と後部が第9節を共有し、且つ第9-11節が見事な結論を形成している点にあるとしている³⁾。このような区分に対する考え方の裏には当然、この詩のもつ構造上の問題からくる解釈論の違いがあることは論を待たない。他にも、それぞれ傾聴に値する解釈論が展開されていて本詩の複雑さを思はせるが、私は最初に述べた立場に立つ。しかるに、まづ Immortality Ode が書かれた経緯から考察する必要がある。

I

この詩が書かれたのは1802年春である。そのとき Wordsworth は妹 Dorothy と Dove Cottage に滞在していた。Dorothy Wordsworth の日記によれば、*To the Cuckoo*, *The Rainbow*, そしてこの詩 *Ode* の最初の部分 (Stanzas, 1-4) が書かれたのは日時の上からは殆ど同日時である。まづ3月26日に *To the Cuckoo* と *The Rainbow* が書かれた。3月26日と27日の日記は次のように記している。

[*March 26th*], *Friday*. A beautiful morning. William wrote to Annette, then worked at *The Cuckoo*. I was ill and in bad spirits—After dinner I sate 2 hours in the orchard. William and I walked together after tea, first to the top of White Moss, then to Mr. Olliff's....While I was getting into bed, he wrote *The Rainbow*.

[*March 27th*,] *Saturday*. A divine morning. At breakfast William wrote part of an ode. Mr. Olliff sent the dung and Wm. went to work in the garden. We sate all day in the orchard. (下線部 筆者)

つまり、一目瞭然、この3つの詩がほぼ同時日に書かれた事が分かる。翌日の27日に「William は *Ode* の一部を書いた」とあるのはいま論じている Immortality Ode の前部 (St. 1-4) のことである。

To the Cuckoo も *Rainbow* も勿論、即興的につくられた訳ではない。その出来事はいずれも遠い子供時代の体験である。Moorman によれば、湖畔地方ではカッコウの鳴き声は四月の終わり頃までは聞かれない。その年、実際に Wordsworth 兄妹がその鳴き声を聞いたのは五月の一日であった⁴⁾。したがって、じっさいに聞いたのでなく平穩の中で思い起こされたその鳴き声に触発されて、意識の上に少年時代の幻想的時間 (visionary hours) が蘇り、地上はもはや地上ではなく、精神の中の一齣の風景 ('a prospect in the mind') となり、「幻の妖精の国」 ('an unsubstantial, faery place') となったのであった。

Thrice welcome darling of Spring!
Even yet thou art to me
No bird, but *an invisible thing*,

A voice, a mystery;

The same whom in my schoolboy days

I listened to; that Cry

Which made me look a thousand ways

In bush, and tree, and sky.

To seek thee did I often rove

Through woods and on the green;

And thou wert still a hope, a love:

Still longed for, never seen.

And I can listen to thee yet;

Can lie upon the plain

And listen, till *I do beget*

That golden time again.

O blessèd Bird! *the earth we pace*

Again appears to be

An unsubstantial, faery place;

That is fit home for Thee!

(*To the Cuckoo*, St. 4-8) (イタリック筆者)

つまり「静かに思い起こされた感情」は奔流となり詩の形をとり多少の悲哀を混えながら歓びに結実する。勿論、想像の中で聞いたカッコウの声は再び夢おおき幻のころ ('visionary hours') を想起させ、「空はもはや地上の空ではなく、宇宙はえも言われぬ歓びでとらえられ、万物の中に一つの生命をみてそれが歓びであった」(*Prelude II*, 430) (1805) 幻の時代 ('visionary hours') つまり、「あの黄金時代」(that golden time') が再生されたのであった。

ところが、前者二つの詩と日時をほぼ同じくして書かれたはずの *Immortality Ode* 前部 (St. 1-4) は事態を一変しているかのように思われる。

There was a time when meadow, grove, and stream,

The earth, and every common sight,

To me did seem

Apparelled in celestial light,

The glory and the freshness of a dream.

It is not now as it hath been of yore; —
 Turn wheresoe' er I may go,
 By night or day,
 The things which I have seen *I now can see no more.*

(イタリック筆者)

この詩の出だしは1800年10月 *Morning Post* で発表された Coleridge の *The Mad Monk: An Ode in Mrs. Ratcliff's Manner* からの以下に示す第2節に負うていることがわかる。

There was a time when earth and sea, and skies,
 The bright green vale, and forest's dark recess,
 With all things, lay long before mine eyes
 In steady loveliness:
 But now I feel, on earth's uneasy scene,
 Such sorrows as will never cease: —
 I only ask for peace;
 If I must live to know that such a time has been!

(*The Mad Monk*, 9-16)

このようにこの二つの詩を比較してみると明らかに言語上の類似性 (verbal echoes) が見られる。しかし内容上の共通性はない。かつては、Coleridge においては、自然のあらゆる物が変らぬ美しさをもって目の前に横たわっていた。しかし「今の私は、大地の不安な場所で終ることのない深い悲しみを覚える。私が求めるのはただ平和のみ。生きてそのような良き時代があったことを知らなければならないとは！」と深い絶望の心境にある。Coleridge は当時持病のリューマチに悩まされ、その苦痛を和らげるために阿片を大量に服用していたと言われる。そのため中毒症状をおこし、心身ともにやつれ、もはや詩的歓びからは遠ざかっていたのである。他方、Wordsworth においては牧場も森も小川も大地も、そして地上のすべての平凡なものが「天上の光りに包まれ、夢さながらの輝きとあざやかさにおおわれていた、幻のような」子供時代を偲び、何処へおもむいても、また昼も夜もかつて見たそのようなものは、今となっては見る事ができないし、昔とは今は違うと現在詩人が置かれた状況に戸惑いを感じられる。しかし、虹、薔薇、そして空に浮かぶ月、また星月夜の水面、朝日のすばらしい輝き (St. 2) を見て彼は美しく感じないわけではない。

But yet I know, where'er I go,
 That there hath past away a glory from the earth.

(St. 2, 17-18. イタリック筆者)

されど我は知る 何処へ行けども、
地上からは栄光が消え去ったことを。

と詩人はいま自分が置かれた状況を嘆いているに過ぎない。一体何が詩人の内部に起こったと言うのであろうか。次の第三節では、

To me alone there came a *thought of grief*;
A *timely utterance* gave that thought relief,
And I again am strong.

(St. 3. 22-24. イタリアック筆者)

ひとり我が胸に悲しみの思い湧く
されど折りよく言葉いでて、わが思い和らぎて、
我れ再び力を得ぬ。

と詠っている。小鳥が楽しげに歌い周りが陽気に満ちているときに作者はふと暗い思いに襲われたのであろう。しかしそれは長続きしたのではなく折しもそのとき口をついてでた詩 (a *timely utterance*) によってそのときの暗い気持ちは和らいだと言うのである。なにがいったい 'timely' であつたのであろうか。Mary Moorman によると、それは本詩冒頭の Epigraph に用いられた *The Rainbow* 「虹」の歌にすぎない⁵⁾としている。しかし Lionell Trilling は *The Leech-Gatherer*, つまりのちの *Resolution and Independence* を挙げている⁶⁾。他に、*The Prelude* の出だし50行だとする批評家もいる⁷⁾。私は Moorman 女史の伝記的示唆にしたがって *The Rainbow* を採用したい。何故なら、その頃 Wordsworth はかつてほどの鋭敏な視覚、聴覚は衰えて、以前ほど自然への輝きも栄光も喪失して暗い気持ちに襲われることが多かったのかも知れない。或は阿片常用のため心身を蝕まれて廢人同様となり詩的能力をなくした友 Coleridge にいたく同情し⁸⁾、やがて自分もそのように詩的能力の衰退を来し詩が書けなくなるのではないかという将来への不安にときどき襲われることがあったのかも知れない。或は、結婚をまじかに控えて、France に残してきたかつての恋人 Annette Valon との心情的結着や、その後の経済的困窮への心配など、或は疲れから来る一時的ノイローゼであつたかも知れない⁹⁾。しかし何れにしても、このときはその暗い気持ちは一時的にして、長続きしなかつたことがわかる。*The Past and The Present* 「過去と現在」、*Loss and Recompense* 「喪失と補償」、このような Pattern はこの作品の主調でもあるが、Wordsworth によく見られる特質の一つと言うことができる。例えば *Tintern Abbey* では、

That time is past,
And all its aching joys are now no more,
And all its dizzy raptures. *Nor for this*
Faint I, nor mourn nor murmur: other gifts

*Have followed, for such loss, I would believe,
Abundant recompense.*

(*Tintern Abbey*. 83-88, イタリック筆者)

その時代は過ぎぬ、
そしてその頃の痛いほどの歓び、
めまいを起こすほどの狂喜もいまはもうなし。
されど我れそのために弱音を吐き、
悲しみ、またつぶやきはしない。
ほかの賜物が続いて与えられ、それは思うに
かような喪失に代って十分な補償を得たからである。

子供時代の対象としての自然は彼にとってはいかなる高遠な思想の支えもなしに、単に感覚的、情熱的なものに過ぎなかった。このことは同じく *Tintern Abbey* の67-87行でも語られている。しかるにそのような時代は過ぎ去ったけれども、そのために失望もなければ嘆きも、愚痴も言わない。そのような喪失に代って十分な補償を得たからであると思うのだ、とある。さらに、また本詩の第十節178-86行でも、

*Though nothing can bring back the hour
Of splendour in the grass, of glory in the flower;
We will grieve not, rather find
Strength in what remains behind;
In the primal sympathy
Which having been must ever be;*

(St. X, 178-83. イタリック筆者)

とある。次に第四節では詩人は幸福な生き物たちが互いに呼び交わす声を聞き、また天もその生き物たちと一体となって歓びに興じ笑うのを見て、自分もそのような春の歓びに参加する。しかし、それらの歓びはもはや自分のものではない。I have heard (36), I hear, I hear, with joy I hear (50), I feel-I feel (41) の如く聴覚と触覚に訴える知覚動詞の度重なる使用はそれとは逆に、かなしくもますますかつての自分が「天上の光、夢のような輝きと新鮮さにつつまれて」'apparelled in celestial light, the glory and freshness of a dream' (St. 1, 4-6), 主体的に無上の歓びの中心にいたのとは異なり、次第にそのような栄光から遠ざかり行き、もはや周りの環境や自然との一体感をもつことの難しさを暗示しているように思われる。そして、いま詩人に語りかけて来るのは子供時代に馴染みの一本の木とそれまで眺めてきた野原である。それが物語るのはやはり「過ぎ去りし或るもの」('something that is gone.')(53)である。その「過ぎ去りし或るもの」とは一体何であろうか。そ

れは他ならぬ幼少期の五感に宿る 'visionary gleam' のことに過ぎない。そして、1802年詩 'Immortality Ode' 前部 (St. 1-4) はこの四節をその最後の2行の問いかけで終わっている。

—But *there's a Tree, of many, one,*
A single Field which I have looked upon,
Both of them speak of something that is gone:
 The Pansy at my feet
 Doth the same tale repeat:
Whither is fled the visionary gleam?
Where is it now, the glory and the dream?

(St. IV, 51-57 イタリック筆者)

そして、Immortality Ode の前部はその答を得ることなくその後2年間書かれることはない。

II

Mary Moorman によれば、Wordsworth 兄妹はこの最初の4節を書いた日の翌日、つまり3月28日に丁度 London から帰宅していた Coleridge を Keswick に訪ねている。また4月4日(日)には、Wordsworth 兄妹が Keswick にまだ滞在中、Coleridge がその日の日没から真夜中の中に、十月の *Morning Post* で発表されることになる Sara Hutchinson に宛てた書簡体詩 'Letter' (これは後に *Dejection: an Ode*, 「失意の Ode」と言う題目で出版される) を書いている¹⁰⁾。つまりこの詩の第20節が Wordsworth の問に答える形をとっていることを考えるとき、Coleridge は Wordsworth のこの1802年詩 'Ode' をその間に読んでいたことが推測され、本詩を考察する上で大変興味深い。

この詩の中で、Coleridge は the Soul 「魂」自身がこの地上を包んでいる「栄光」the Glory の起源であるとし、次のように詠う。

O Sara! we receive but what we give,
 And in *our* Life alone does Nature live.

Ah! from the Soul itself must issue forth
A Light, a Glory, and a luminous Cloud
Enveloping the Earth!"
 And from the Soul itself must there be sent
 A sweet & potent Voice, of it's own Birth,
 Of all sweet Sounds the Life & Element

(Dejection: an Ode, St. XX 296-307. 下線部 筆者)

おお！セアラよ我らは与えるものだけを受取り、
そして自然は我らの生命の中にのみ生きている。

....

ああ！魂そのものから、
大地を包む光と栄光と輝く雲が
生まれ出るに違いない。

....

これは、2年後に Wordsworth が書くことになる Ode の後半部 (St. 5-11) に示された解答とは異なる点については多くの批評家が指摘するところである。Coleridge は the Glory 「栄光」の源は the Soul 魂にあるとするのに対し、Wordsworth はこの段階においては、まだ「かつて存在したが故に存在するであろう原初の共感」(the primal sympathy/Which having been must ever be) (St. X, 182-183) に期待しているからである。

Wordsworth はそれから2年後の1804年に、いわゆる1802年詩 'Ode' の問ひかけにたいする解答として、Platonism の哲学の衣装を纏って登場する。第五節から第八節まではやがて歳月の避け難いくびきを招いて、魂は浮世の重荷を負い、「習慣によって霜のように重く、生命のように根深く」(St. 9, 129) 圧せられて一見「絶望」の感を深めながらも、1802年詩への説明、殊に第5節は Whither is fled the visionary gleam? / Where is it now, the glory and the dream? とする問いかけに対する直接の説明を試みている。

Our birth is but a sleep and a forgetting:
The Soul that rises with us, or life's Star,
Hath had elsewhere its setting,
And cometh from afar:
Not in entire forgetfulness,
And not in utter nakedness,
But trailing *clouds of glory* do we come
From God, who is our home:
Heaven lies about us in our infancy!

(St. V, 58-66. イタリック筆者)

ここでは生前説 Pre-Existence が大胆にもはじめて登場する。それによると我々人間の誕生は前世において活躍していたその魂が眠りにつき、また忘却の彼方におき忘れ去られるようなものであると語り、以下天上にあらわれる太陽と星の image によって説明されている。つまり、「われらとともに立ち昇る魂、我らの生涯の星」とは産まれたばかりの幼児の魂を意味するが、それは「遠い彼

方からやってくる」(66) と言うことによって別の世界からの幼児の魂の旅の遠さを思わせる (And cometh from afar) (St. 1, 4)。といえどもそれは完全な忘却や裸身になってやって来るのではなく、栄光の雲をなびかせながら、「我らの故郷、神」のもとからやってくると言う。したがって「幼児期には天国がわれらの周りをとりまいている」と言うことになる。ところが、年齢を重ねるにつれて、しだいに天上の栄光が薄らいで行くさまが少年時代、青年時代、壮年時代へと Beatty の分析による 'three ages'¹¹⁾ に従って語られる。

Shades of the prison-house begin to close
 Upon the growing Boy,
 But He
 Beholds the light, and whence it flows,
 He sees it in his joy;
 The Youth, who daily farther from the east
 Must travel, still is Nature's Priest,
 And by the vision splendid
 Is on his way attended;
 At length the Man perceives it die away,
 And fade into the light of common day. (67-77)

当然、育ち行く少年の上には次第に牢獄の影が射して行くが、それでもこの時期の彼にはまだ光 (天上の) と、その光源は視野の中にある。そして、さらに東から遠ざかって行く青年期にも、彼はまだ自然に仕えることの出来る祭司 (Nature' Priest) (73) であって、彼の行く手には素晴らしい幻影がつきまとう。しかし、遂に大人になれば、そのような幻影も薄れて平日の光へと消えて行くという。これは、Whither is fled—? Where is it now— (56-57) の問に対して、彼が2年後にしてはじめてみつけた解答であった。

しかして、そのような Platonism を彼は一体どのように考えていたのであろうか。詩人が自ら付した I. F. Note によれば、

It is far too shadowy a notion to be recommended to faith, as more than an element in our instincts of Immortality. But let us bear in mind that, though the idea is not advanced in revelation, there is nothing there to contradict it, and the fall of Man presents an analogy in its favor. Accordingly a preexistent state has entered into the popular creeds of many nations; and, among all persons acquainted with classic literature, is known as an ingredient in Platonic philosophy.... I took hold of the notion of pre-existence as having sufficient foundation in humanity for authorising me to make for my purpose the best use of it I could as a Poet.¹²⁾ (イタリック 筆者)